

『古代東国にやってきたのは出雲だった』

たかみやしんじ

日本には1万年を超える縄文時代という豊かな時代があった。列島に海外からの人や文化が緩やかに入ってくる中で、固有の文化が醸成されていた。そして、稲作や金属器などの画期的な文化が海外から九州地区や出雲などにもたらされた。この急激な変化が時代を弥生へと進めていくことになったとされている。

弥生時代以降の文化や技術などの伝播は表面的に捉えたと伝播ということであるが、新たな稲作の地を求めたり、新たな金属資源などを求めたりした人々の動きと捉えるほうがより本質に近づくのではないだろうか。そして、それが小国になったり広域の大国になったり、更には政権(朝廷)となったりすると、それは進出とか覇権の主張といったことになっていったものと考えられる。

序章 翡翠と黒曜石

翡翠は深緑の半透明な宝石の一つである。東洋(中国)、中南米(インカ文明)では古くから人気の高い宝石であった。それでも、現在判明している世界最古の翡翠の加工は、新潟県糸魚川市の縄文時代中期(約5000年前)頃始まったとされている。そして、日本では弥生時代・古墳時代においても珍重され、祭祀・呪術に用いられたり、装身具や勾玉などに加工されていた。「古事記」の記述では、天照大神を天の岩屋から誘い出す場面で榊の上枝に勾玉が吊るされたりしたのである。

しかしながら、奈良時代になると見向きもされないようになった。それは仏教の伝来によるのであろう。時の権力構造が従来の神道系から仏教系に変わったことにより、仏教以外のものは一気に廃絶されてしまうのである。このような祭祀の態様の大変化は初めて起こったことではない。かつて崇神天皇が立った時、出雲系の銅鐸祭祀を絶滅(一斉に地中に埋めてしまう)させるということがあったのである。これが有名な、荒神谷遺跡に358個の銅鐸が突然埋められた真の理由だったのである。

さて翡翠の産地であるが、日本では矢張り新潟県糸魚川市が著名である。糸魚川市姫川上流に産出地がある。そして、糸魚川市「長者ヶ原遺跡」は翡翠を中心とする石材の一大加工場の村(ムラ)であったとされるのである。しかも、北海道から九州に及ぶ全国の遺跡から発見されている縄文時代の翡翠製品は、成分分析の結果、殆どが姫川流域のものであることが判明しているという。

ということは、縄文時代に翡翠を流通させるルートがあったということを想像させる。所謂「翡翠ロード」というものが想定されている。一つは、糸魚川流域から長野県→山

梨県→関東に至る経路である。もう一つは、糸魚川流域から日本海沿岸→青森→北海道である。これらは有力な二経路であるが、全国で発見されているのであるから、日本海沿岸を經由して、山陰や九州に流れていた道も想像されるところである。

黒曜石は火山岩の一種でそれを加工した宝石をいう。外見は黒く、ガラスとよく似た性質をもち、割ると鋭い破断面を示すことから先史時代よりナイフや矢じりなどとして使用された。日本でも後期石器時代から使われていたようである。日本には70ヶ所以上が産地として知られているが、縄文時代の代表的な良質な黒曜石の産地は、北海道白滝村、長野県和田峠・霧ヶ峰、栃木県高原山、東京都伊豆諸島神津島、島根県隠岐島、大分県姫島などが知られる。

松田光太郎氏が Web サイトに、阿部芳郎編「移動と流通の縄文社会史」の書評を掲載されている。その第 I 章一 2 に、堀越正行氏の「東京湾東岸地域の縄文社会と黒曜石利用」という論文がある。千葉県を七つの地域に分け、黒曜石の産地推定結果を集成し、各地域の黒曜石産地の傾向を抽出した。その結果、房総丘陵地帯では全期間通じて神津島産が殆どである。京葉東部地域は神津島産が多いが縄文中期末に信州産が主体を締める遺跡が登場する。京葉西部地域では中期以前は神津島産が主であるが後期になると信州産が多くなる。東葛地域では信州産が神津島産より多く、高原山産も入ることが特徴として上げられる。

又、京都大学藁科哲男氏によれば、富山県下の旧石器・縄文遺跡の黒曜石を分析した結果、旧石器時代では霧ヶ峰産と秋田県深浦産、縄文時代では霧ヶ峰産と山形県月山産と判定されているという。

長野県和田峠・霧ヶ峰から八ヶ岳山麓一帯には、黒曜石の採掘地点が20ヶ所以上確認されているという。そして採掘する人、加工する人、交易する人が集まってきた。旧石器時代から縄文時代にかけては正しく「黒曜石ラッシュ」だったと言われるのである。そして、「翡翠ロード」ほど広域ではないものの、中部山岳地帯中心に日本海側へ太平洋側へと流通する「黒曜石の道」が広がっていたのではないかと考えられる。しかしながら、日本産黒曜石では良質のものであったので遠く青森の「三内丸山遺跡」で出土が確認されており、より広域に流通していた可能性もある。

このように隆盛していた「黒曜石」であるが、弥生時代後期から奈良時代には殆ど流通されなくなったと言われる。それは、海外文化と技術の渡来、即ち青銅器や鉄器の流入がその理由であろう。しかしながら、旧石器時代・縄文時代を通じて広がった「翡翠ロード」、「黒曜石の道」が消えることはなかった。後の五畿七道の山陰道、北陸道、東山道などのベースになっていたことは想像に難くないのである。

第一章 武蔵国への弥生文化の伝播

イ) 縄文人の北上と南下

縄文時代の関東平野は「縄文の海進」により多くの部分が海だったといわれる。そして、この地区の縄文人は照葉樹林帯の植物性食料と内湾性の漁撈などによっていた。特に貝塚については日本全体の6割がこの文化圏のものといわれている。しかしながら、縄文後期（紀元前2000年頃）から弥生初期（紀元前1000年頃）にかけての寒冷化による「海退」や植生の変化により、この時代の縄文人は大きな影響を被ることとなる。その結果、この地区では大きな人口低下が起こったとされるのである。

このような寒冷化や「海退」は、水際の漁撈に頼っていた関東南部の縄文人の生存率を低下させることになっていった。しかしながら、当時の縄文人が何も対策しないでいたとは考えられない。生存率を高めるための工夫をし知恵を働かせたことであろう。それは豊であった先祖からの地を離れて、食料を求めて移動することだった。その頃（BC900年頃）発生した富士山東斜面での大規模な山体崩壊と泥流の流下は南への道を閉ざした。西には山しかない。東は海が退いていった。となれば北への道しかなかったのであろう。その移動先は現在の群馬県や栃木県南部ということになるのではなかろうか。これらの地域で弥生時代から古墳時代の多くの遺跡が残されるのは、縄文晩期に人の移動によって培われたものと考えられるのである。そして、そこには碓氷峠を越えて出雲族が弥生文化をもたらしてきたのである。上野国一宮貫前神社（ぬきさき・群馬県富岡市）、下野国一宮二荒山神社（栃木県宇都宮市）、武蔵国三宮氷川神社（埼玉県さいたま市）と界隈で主要な神社は皆祭神が出雲系である。それらのことが上記のことを示しているものと考えられる。

主として東日本に多く残されている「再葬墓」というものがある。何ゆえに再葬が行われたのか、何ゆえに大勢の人の遺骨が土器に収納されたのかなど謎が多く、未だ説明されないことの方が多いのである。本稿では一つの仮説として、上記のように先祖から続く土地から移動せざるを得なくなった縄文人が一族の首長や家族の遺骨を土器に収納して移動し、着地できた場所に埋葬したのではないかとすることを推量しておきたい。津波や洪水、又「海進」「海退」といった大きな自然現象によって住居を移動せざるを得なくなった縄文人がとった先祖への畏敬の念が伝わってくるようである。

そして時は流れる。そして、地盤が落ち着いてきた関東平野に北へ逃れた縄文人が戻ってくるのである。しかしながら、かつての縄文人がそのまま戻ってきたのではなく、信濃国経由で関東北部に進出してきていた出雲族から稲作や先進技術を取り入れて、かつての地に戻ってきたのである。そして、荒川や多摩川の沿岸各地に村を築いていったのであった。やがて、村と村は集合して小国になる。かかるプロセスは北九州地区における国の形成と同様であったのだろうと考えられる。

ロ) 弥生文化の伝播の検証

金井恂氏（安曇誕生の系譜を探る会・会長）が NET に掲載されている「安曇誕生の

系譜を探る 試論」という論文がある。安曇族が長野県安曇野に進出してきたルートを論じておられるものである。その中で、大場磐雄氏の「信濃国安曇族の考古学的一考察」という論考を取り上げられている。大場氏によれば、安曇族の進出ルートは東海地方の尾張・美濃、或いは三河方面からの進出ルートは諏訪族の分布地域を経由することになり、そこを通過することは困難であったろう。そこで、日本海から姫川を遡行するルートが最も有力であるとされているのである。又、安曇族の分布地において銅剣石剣が弥生式土器と共に出土していることから移動時期は弥生時代とされているのである。

これに対して金井氏は、最近の考古学的調査研究によると弥生人が信濃国に進出してきたのは弥生時代中期前半とされている。このことから、安曇族の信濃進出もこの頃と考えられ、それは諏訪族進出以前のこととされるのである。そして、弥生人たちは美濃・尾張方面から先ず伊那谷に入り、諏訪地方に至り、そして佐久平・善光寺方面と松本方面へ別々に進出した。更に、碓氷峠を越えて群馬県・埼玉県方面へ進出していったとされている。安曇族もこのルートをとったものと推論されているのである。

弥生人の信濃進出ルートを検討するにあたっては、翡翠と黒曜石のことを考えなければならぬだろう。糸魚川市姫川の翡翠は日本唯一のもので、その流通のため「翡翠ロード」が形成された。縄文時代から弥生・古墳時代まで珍重されたが、祭祀の比重が仏教に移るに伴い衰退してゆく。一方黒曜石の産地は全国にあったが、和田峠・霧が峰の黒曜石は極めて良質のものであった。そのため、中部地区中心に「黒曜石の道」が形成された。しかしながら、弥生時代後半くらいからの青銅器・鉄器の伝播により次第に影を薄くしてゆく。

本稿・序章にみるように、翡翠と黒曜石は縄文時代においては隆盛を極めていたのである。「翡翠ロード」は山陰から越後にかけての日本海側、そして糸魚川から松本、諏訪を経由して甲斐に通じていたとされている。「黒曜石の道」も諏訪を中心にして、中部地区各地に通じていたとされる。日本海側では善光寺経由で越後、松本経由で糸魚川に通じていたであろうし、佐久から碓氷峠を越えて北関東にも通じていたのである。

ところで、信濃国への弥生人の他国からの進出については、上記に論じられているように大きくは、安曇族と出雲族の二つの進出があった。一つは安曇野と呼ばれる地域に着地する安曇族の進出であり、もう一つが「古事記」に描かれる建御名方神の出雲から諏訪への逃亡と蟄居とされているのである。しかしながら、その安曇族の進出や出雲族の進出は一回で終わりというものではなかった。以下にてその進出の状況を復元してみることにする。

安曇族は越に滅ぼされた呉の末裔で、江南から船で逃れ北九州に辿りついた。そして、稲作や先進技術を伝えやがて奴国を興す。AD57年には中国に朝貢し後漢光武帝より「漢委奴国王」の金印を与えられる。この頃が奴国の絶頂期であった。それ以前から力を蓄

えてきた安曇族は北九州に留まらず、持ち前の海運力を活かし日本各地に進出していったのである。渥美、熱海などの地名が進出の足跡を残すものとされる。又、上記金印が福岡県博多湾志賀島で発見されたことから、滋賀、四賀などの地名を残すとも言われる。

安曇族が愛知県渥美半島に着地した。そして、東海地域に稲作と先進技術を持ち込み縄文人と融合して発展させてゆく。この部族が伊那谷を上り諏訪を目指した可能性がある。諏訪界隈は縄文時代以降黒曜石を産して隆盛していた地域であり、狩猟中心に栄えていたが、縄文時代晩期頃からの寒冷化の影響で食料事情が悪化してきていた。ここに稲作文化を受け入れざるを得ない背景があった。では、諏訪界隈に稲作文化をもたらしたのは安曇族であったのだろうか。

「古事記」にスサノオのヤマタノオロチ退治の話がある。高天原を追われたスサノオは出雲国に降り立った。そして、山ノ神（オオヤマツミ）の子アシナヅチと妻テナヅチの娘（クシナダヒメ）をオロチから救い、クシナダヒメを娶り須賀の地に宮を建て暮らすのである。このオロチの尾から草薙の剣がでてくることから、オロチは製鉄豪族ではなかったか、そして、オオヤマツミは弥生文化（稲作や金属技術）をもたらした渡来系の一族ではなかったかと考えられるのである。

長野県諏訪市には、手長神社（祭神 手摩乳命てなづちのみこと）と足長神社（祭神 脚摩乳命あしなづちのみこと）が鎮座する。共に建御名方神に随従する神で、建御名方神が諏訪大社に祀られる以前からこの地で信仰されていたとされるのである。ということは、建御名方神が諏訪に来る前にオオヤマツミ系の人々が諏訪に弥生文化をもたらしていたと考えていいのではなかろうか。

諏訪地区に最初に弥生文化を伝えたのはオオヤマツミ系出雲であった。そして、その後建御名方神が諏訪に進出してくるのである。

建御名方神は、スサノオの娘（スセリヒメ）に入り婿したオオナムジの御子とされるが、スサノオ没後出雲界隈を治めていたものと考えられる。本欄（全邪馬連投稿欄）の小稿（「国譲りは関東で繰り広げられていた」）第三章で記述したとおり、スサノオの御子大歳尊の「大和国」建国に呼応して、建御名方神は山陰から越、信濃・諏訪の平定に向かうのである。これは、稲作や先進技術の伝播などとは訳が違う。越と諏訪を制するための進軍であった。越と諏訪を制することには意味があった。それは「翡翠ロード」と「黒曜石の道」を制することだった。従って、建御名方神軍は糸魚川市から姫川を上り安曇野に着く。しかし、この頃安曇野は湖沼であったと言われる。これを避けて長野方面に向かい、上田・佐久方面から松本・諏訪に進んだものと見られる。そして、この「翡翠ロード」と「黒曜石の道」を出雲族が押さえたことで、後続の出雲族が上田・佐久方面から碓氷峠を越えて、北関東に進出していくのである。

こうして建御名方神は諏訪を席卷したのであるが、自然信仰をベースとする諏訪衆を認め、スサノオを祀る出雲族と共存する形で決着させたのである。これが諏訪大社の上

社、下社という二社体制の原形だったと考えられる。即ち、「モレヤ神」をいただく諏訪衆と、スサノオを租神とする出雲衆が両立することとなったのである。この建御名方神の諏訪進出は、神武天皇の東遷の少し前のことだったとみられる。本欄で度々参照させていただいている山下重良氏の研究によれば、神武天皇の誕生はBC60年とされている。多くの研究者の指摘する時期も概ね紀元前後であるので、本稿においてもその頃の神武天皇の誕生をイメージしておきたい。とすれば、建御名方神の諏訪進出は紀元前1世紀頃のこととなるのである。

では、安曇族の安曇野進出は何時頃のことになるのであろうか。上記のように、建御名方神が諏訪を平定したのが紀元前1世紀頃であった。そして、それより以前にオオヤマツミ出雲族が弥生文化を諏訪地区にもたらしていた。とすれば、安曇族が伊那谷経由で諏訪に入ってきたという推論が成り立ちにくくなっていく。このように論を進めると、どうも安曇野への安曇族の進出は紀元前1～2世紀ではなかったようである。とすれば、もう少し後の時期ではなかったかと思われてくるのである。磐井の乱（527年）に加担した一族が安曇野に逃げてきたり、白村江の戦い（663年）を戦った安曇比羅夫が穂高神社内に祀られていることから、安曇野は安曇族にとって重要拠点とされている。即ち、王家を継承しているような地ということではないだろうか。ということは、王族を移動させないとならないような事が起こったのである。その事とは魏志倭人伝に伝わる「倭国大乱」の事ではなかろうか。「倭国大乱」では、オオクニヌシ出雲が北九州に覇権を主張してきた。窮地に陥りつつあった奴国は、一部部隊が王族を守るため安曇野に移動したのではないかと推論する。この倭国大乱は紀元2世紀のことであった。船団を組んで越に入り姫川を上ったものと考えられる。

第二章 諏訪大社の起源

全国に諏訪神社と称される神社が約6,500社あると言われる。それらの神社の殆どは信濃国諏訪大社から勧請されたものと考えられている。勧請された時期は古代であったり、中世や江戸時代であったり様々であろうが、ここでは古代に注目してみたい。本欄の小稿（「国譲りは関東で繰り広げられていた」）において国譲りについて論じた。「古事記」では出雲を舞台にして記述される国譲りであるが、本欄では関東を舞台にした出雲系と日向系の勢力争いの記憶を「古事記」が国譲りとして描いたのではないかと推論した。そして、出雲側の大將は建御名方神であったことを推論した。この建御名方神こそ、信濃国諏訪大社の主祭神なのである。

又、本稿・第一章において弥生の海退で関東北部に移動していた縄文人が、出雲族から稲作や先進技術を取り入れ、南下して関東南部に戻ってきたことを推論した。そして、どうやら彼らは荒川を下ってきて多摩川を上がっていったらしいのである。

武蔵国にも由緒が古いと思われる諏訪神社が幾つか鎮座する。そして、その多くは多摩川

の沿岸近隣に鎮座しているのである。それはあたかも諏訪神社が多摩川を遡上しているが如くである。果たして、上記の縄文人の南下と諏訪神社の鎮座には何かしらの関連があるのだろうか。本章ではその前段として、まずは諏訪大社を訪ねてみたい。

イ) 諏訪大社について

諏訪大社は長野県諏訪湖周辺四ヶ所にある神社である。式内社(神明大社)にして、信濃国一之宮である。近代社格制度においては官幣大社に列せられ、現在は神社本庁の別表神社である。先に記述のとおり、全国に約6,500社あると言われる諏訪神社の総本社である。大きくは上社と下社に分かれており、上社には本宮と前宮が鎮座する。そして、下社には秋宮と春宮が鎮座する。この四社を総称して諏訪大社というのである。

上社・本宮。諏訪市中洲に鎮座する。主祭神は建御名方神で、ご神体は裏の御山であるとされる。拝殿など国の重要文化財が多くあるが、目をひくのは「布橋」という渡り廊下のような建物で、古くは大祝(おおほおり)のみが渡ることができ、布が敷かれたことからそのように言われるという。拝殿横には東宝殿・西宝殿が配されている。上社・前宮。茅野市宮川に鎮座する。主祭神は八坂刀売神(女神)である。こちらが諏訪大社の祭祀の発祥地とされる。当地には、上社大祝の始祖とされる諏訪有員が初めて大祝に就いて以来、大祝の居館が設けられていたという。大祝は現人神とされていたことから、その居館は神殿(ごおどの)と尊称されその周辺は神原(ごおはら)と呼ばれていたという。前宮は神社鳥居をくぐり、坂を暫く登っていく。そして、やっと拝殿・本殿にたどりつく。

下社・秋宮。下諏訪町武居に鎮座する。主祭神は八坂刀売神で、ご神体はイチイの木とされる。神社鳥居をくぐり少し坂を歩くと、神楽殿、その後ろに幣殿と拝殿が一体となった幣拝殿がある。下社・春宮。下諏訪町下ノ原に鎮座する。主祭神は同じく八坂刀売神で、ご神体は杉の木とされる。神殿の構成は秋宮とほぼ同様である。

以上の記述は諏訪大社の現在の態様である。では諏訪大社の起源はどのようなことであっただろうか。諏訪大社のそもそもの祭神はミシヤクジ神など土着の神々であると言われており、今尚行われている神事や祭祀は土着信仰に関するものであるとされているのである。

*ミシヤクジ神…樹木、石、大祝など万物に降りてくる精霊。

諏訪大社の起源を考えるに際し想起されるのは、諏訪地方が縄文時代に栄えた「黒曜石」の産出地ということである。和田峠・霧ヶ峰から八ヶ岳山麓一帯には「黒曜石」の採掘地点が20ヶ所以上確認されている。そして、採掘する人、加工する人、交易する人が集まってきた。旧石器時代から縄文時代にかけては正しく「黒曜石ラッシュ」だったと言われるのである。縄文時代中期には、井戸尻遺跡(長野県富士見町)、尖石遺跡(同茅野市)など「縄文王国」と言われるほど隆盛した地域だったのである。しかしながら、縄文時代晩期頃からの寒冷化の影響で食料事情が悪化し人口も大きく低下することになる。このような自然環境の変化に縄文人はどのように対応したのであろうか。やはり、寒冷化で自然環境の悪化した土地を離れ、

そして諏訪湖周辺に住居を構えるようになっていったのではなかろうか。

諏訪大社には、上社御射山社(ハヶ岳山麓)、下社御射山社(霧ヶ峰)という奥社がある。これらは里に下りてきた縄文人が祖霊を祀ったものといえるのではないだろうか。そして、里には里でミシャクジ神を祀ったのであろうと考えられるのである。

さて、このような時代の流れの中で弥生時代を迎えることとなる。弥生時代といえば、稲作と金属器の使用そして朝鮮や大陸から持ち込まれた縄文時代とは異なる祭祀の伝播である。北九州や出雲地方で萌芽した弥生文化が北へ北へと伝播してくるのである。それは、弥生文化を帯同した人たちの覇権の主張でもあったのである。

諏訪地方にも出雲族がやってきた。本稿第一章で記述したように、最初に諏訪にやってきたのはオオヤマツミ出雲であった。そして、次にやってきたのが建御名方神だった。建御名方神は、「古事記」では出雲国・オオクニヌシと越国・奴奈川姫の子で、国譲りに反対して建御雷之神との力比べに敗れ諏訪の地に逃げて、そこから出ないことを条件にして許されたとされている。しかしながら、史実はそのようなことではなかった。建御名方神はスサノオの婿養子・オオナムジの子であり、スサノオの子・大歳尊の「大和国」建国に呼応して、山陰から越、信濃・諏訪の平定に向かっていたのである。では、何故建御名方神は信濃・諏訪に向かったか。それは、諏訪地方が黒曜石の産出・流通などで縄文時代から栄えていた。そして、先行してオオヤマツミ出雲族が進出していた。そのようなことから考えて、建御名方神が諏訪に向かうのは極く自然な流れだったものと考えられる。

しかしながら、その頃の諏訪の地は土着信仰をベースにした諏訪衆が弥生文化を吸収して大きな勢力を築きつつあった。ここに、大きな争いが起こるのである。そして不毛の争いを避けるべく、建御名方神を中心とする出雲系勢力と強力な諏訪衆の勢力を両立させることで決着する。出雲系はスサノオを祭神として祀り、これが下社の前身となった。諏訪衆はミシャクジ神を祀り、これが上社の前身となったものと考えられる。そしてその後も諏訪地方は強い勢力を築き、出雲族の関東への進出の拠点として機能するなど、大いに発展していくのである。

さて、ここまで記述を進めてくると「古事記」の記述において、何故建御名方神が敗走するような不遇な扱いをされなくてはならなかったかを知りたくなってくる。その答えはスサノオにあるだろう。「古事記」ではスサノオを天照大神の弟として登場させながら、乱暴神として描きやがて天孫族から外されてしまうのであった。そして、建御名方神はスサノオの末裔なのである。だから、英雄として扱う訳にはいかなかったのである。

では、「古事記」でそのように描かれる建御名方神が何故諏訪大社の祭神とされたのであろうか。それは、天武天皇による宗教改革に関係するものと考えられる。宗教改革においては天照大神を祖とする天皇家と、各地の神社をその体系の中に取り込み、各地に祀られていた神社は保護と引き換えに国家管理に服せしめられた。このような中では、土着神は認められなかった。増してや天照大神に逆らったスサノオが祭神として座するなどあり得なかったのであ

る。実は、諏訪衆はこの宗教改革に簡単には恭順しなかった。しかしそうはいつでも、一地方で中央の力に抵抗するには限界があった。やがて、中央に屈せざるを得なくなる。そして、それまで崇めてきたスサノオや土着神に代わり、建御名方神が祭神とされたのである。

ロ)御柱祭について

諏訪大社といえば有名な御柱祭というお祭がある。正式には「諏訪大社式年造営御柱大祭」という。寅年と申年の6年ごとに縦の巨木を奥山から切り出し、諏訪大社四社殿の四方に建てて神木とする諏訪大社の最も重要な神事である。御柱の建立と同時に、宝殿の建て替えと宝殿内の神器の遷座も行われる。

この御柱祭の起源については諸説あって今尚謎とされている。諸説の一つに、建御名方神は建御雷之神に敗れて諏訪の地に辿り着きこの地を出ないことを条件に許されるのであるが、その時「結界」として神社の四方を御柱で仕切ったというものがある。この説は「古事記」の記述を基にした説であるが、実際には建御名方神はもっと以前に諏訪地方に定着していたのであり、この説は成り立たないのである。又、土着信仰であるミシヤクジ神の依り代とする説がある。この説も神社のご神体が御山や樹木とされていることと整合性がなく、後の人が御柱を樹木信仰に当てはめたと考えるのが相当ではないかと考えられる。

本稿では遷宮制度に基づくものとする説を採用したい。遷宮制度は天武天皇時に制定されたものとされる。現在でも伊勢神宮や多くの神社で20年に一度の式年遷宮が行われているという。この式年遷宮には莫大な費用と多くの労役を要する。従って、これは各地豪族の自主的な祭祀とは考えにくく、天武天皇の時代にその宗教改革に伴い、伊勢神宮を見本にして全国の神社(豪族)に指令したものであろう。名目的には神社の清浄さを維持するためということであるが、それは同時に地方に負担を課し地方の強大化を防止する措置であったろう。「諏訪大社式年造営御柱大祭」は6年に一度行われる。これは、中央が諏訪に対して特別に過酷な扱いをしたということが窺われる。言葉を変えていうならば、それほどに中央は諏訪勢力の強大化を恐れていたということだろう。

伊勢神宮で行われている式年遷宮は、所定の山から建材を切り出す、そして神社に運搬する、そして内宮・外宮、別宮の社殿など総てを造り替えて神座を遷すのである。これらの態様は諏訪大社の御柱祭と多くの共通点がある。正しく、御柱祭は遷宮制度に基づくものであったと考えられるのである。

諏訪大社の場合は、奥山から縦の巨木を切り出す、そして神社に運搬(曳行)する。そして、宝殿の建て替えと御柱の建立が行われるのである。この御柱の建立は四本の巨木を神社の四箇所建てるのであるが、これは正しく社殿の柱の建立を意味しているのであり、言わば社殿の建て替えの代わりに行なわれるのである。当初は社殿の建て替えが行われていた。しかしながら、6年に一度という過酷な遷宮は次第に達成できなくなる。そこで、考えられた方策が御柱の建立ということであろう。

出雲弥生の森博物館(島根県出雲市)には四隅突出型古墳(西谷3号墓)のジオラマが館内に展示されている。そして、ジオラマでは紀元2世紀頃築造されたと考えられる西谷3号墓に埋葬されたであろう王の葬儀の様子が再現されているのである。古墳上部中央に棺が埋葬される。そして、それを囲むように四本の大きな柱が建立されつつあるのである。

西谷3号墓では、大きな土壌の底に棺を置いた後、その上に4本の巨柱を用いた施設が建てられていた。又、棺の真上には朱のついた丸い石がご神体のように置かれていた。その上には200個にもものぼる土器が出土した。これらのことから、築造した古墳の上では、亡き王を埋葬した後4本柱の施設を建て、中央に置いた赤い丸石を敬いながら多くの参列者が飲み食いをしていたものと推論されているのである。

この丸石や王の棺を諏訪大社の祭神に見立てれば、正しく諏訪大社の4本の御柱はこの出雲王の葬儀に際し建立された4本の巨柱を用いた施設の流れを組むものと理解されるのではないだろうか。

第三章 信濃国の秘話

諏訪大社の縁起を記した「諏訪大明神絵詞」というものがある。著者は諏訪上宮大祝家神氏庶流の諏訪円忠で、成立は1356年とされる。その「諏訪大明神絵詞」に神功皇后の新羅征伐の段がある。曰く。“龍宮の船頭、安曇磯良丸靈亀に乗りて参向し御舟を漕ぐ。数艘の兵船四方を囲み奉りて、諏方、住吉二神殻葉(かちのは)、松枝の旗を上げて先陣に進み給えば群鳥虚空に飛びかけり、大魚波に浮かび出でて兵船を守りて忽ちに異域に至る。”カチノハとは梶の葉＝諏訪大社の神紋である。これは、神功皇后の朝鮮半島出兵に諏訪衆が参加し、大いに活躍していた事を記述しているのである。

時代は少し下がるが、桓武天皇(第50代、781年～806年)から征夷大將軍に任じられた(797年)坂上田村麻呂は蝦夷平定に先立ち諏訪大明神に戦勝祈願している。そして、蝦夷平定後は神恩感謝のため諏訪郡の田畑山林各千町歩と毎年の作稻8万4千束の奉納が為されている。問題はこの記事をどのように読むかである。征夷大將軍が単にお参りだけに諏訪大明神に立ち寄ったとは考えられない。そこでは、何がしかの精鋭部隊が要請され、編成されたとするのが自然な読み方ではないだろうか。そのように読むと、ここでも諏訪衆の軍神としての大きな勢力が髣髴とされるのである。

「善光寺」(長野県長野市)は、日本最古といわれる一光三尊阿弥陀如来を本尊とする日本有数の古寺である。その縁起。“欽明十三年(552年)、百済の聖明王から金銅の仏像一体と、幡蓋(はたきぬがさ、天蓋とも)・經典が献上された。そこで、天皇は仏を祀るべきかどうかを臣下に相談することになる。大臣・蘇我稲目は、中国や朝鮮で礼拝されているものであることから賛成する。しかしながら、大連・物部尾輿は国神の怒りを恐れてこれに反対するのである。

両論の採否を決めかねた天皇は、賛成した蘇我氏に仏像を与えるのであった。蘇我稲目は早速に寺を建てて仏を祀るのだが、その後国内に疫病が俄かに流行する。これをみた物部尾輿は、異国の神を祀ったためとして蘇我氏の建てた寺を焼き払い、仏像を海に投げ捨ててしまうのであった。推古天皇八年(600年)、上洛していた本田善光(古墳時代の信濃国の人物)がそこを通りかかると、その仏像(阿弥陀如来像)が水中から出現して背に乗った。善光はこれを持ち帰り、元善光寺(長野県飯田市)に安置する。その後阿弥陀如来像の霊告があり、信濃国水内郡の善光寺(長野県長野市)に移座し如来堂を建立して祀った”とある。又、伝承では、この移動の間諏訪の善光寺に7年間とどまり、諏訪大明神のお告げにより長野に移ったと言われている。

さて、この物語本当であろうか。善光寺の創建秘話としては面白いが史実とするには今ひとつ何かが欠ける。本書では一つの推論を示したいと考える。この頃蘇我氏は全国に覇権を主張したいと考えていた。屯倉の全国展開がその一つの現れであろう。そのような観点で考えると、蘇我氏の信濃国への覇権主張がこの阿弥陀如来像の安置であったとすることで得心がいく。即ち、蘇我氏は本田善光に命じて、信濃国の南(飯田市)から順次諏訪、長野へと勢力を築いていくのである。強力な諏訪を説き伏せるのには7年の歳月を要したのである。では、善光寺に安置されている阿弥陀如来像は、百済の聖明王の阿弥陀如来像そのものであろうか。それは誰にも分からない。誰も観ることができない「絶対秘仏」とされているからである。

これらのお話から読み取れるのは、信濃国(諏訪)が縄文時代から引き続いて弥生時代から奈良時代においても確固たる勢力を維持していたということである。そして、それは中央(朝廷)をも恐れさせるに十分な力を有していたということである。それは、諏訪が出雲系であったから尚更のことであつたらう。

「古事記」で記述される出雲の国譲りは出雲と中央(高天原)の相克として描かれるが、最後は建御名方神が諏訪に敗走し、諏訪の地を出ないことを約して許される結末となるのは、上記のような背景があるからであろう。とすれば、出雲の国譲りの史実とは一体どのようなことであつたのかということをもう一度考えなくてはならなくなる。本欄の小稿(「国譲りは関東で繰り広げられていた」)では、その一端を示したつもりである。

終章 諏訪神社は多摩川を遡上したか

「大國魂神社」(東京都府中市)は武蔵国の総社であつた。武蔵国の一之宮から六之宮までを合わせ祀るため「六所宮」とも呼ばれる。主祭神は大國魂大神であり、オオクニヌシと同神ともいわれる。この大國魂神社の六所宮の一つとされている神社に杉山神社(六之宮)がある。杉山神社は神奈川県横浜市を中心に川崎市、東京都町田市、稲城市などに数十社あると言われている。これらの神社はいずれも主祭神を五十猛命とし、鶴見川水系の大地に鎮座する。このことの意味するのは、かつて五十猛命を租とする一族が鶴見川界隈にやってきて

土着の人々と融合し小国を築いたのではないかと推論されるのである。

この五十猛命はスサノオの御子神で、「日本書紀」によればスサノオは五十猛命を引き連れて新羅に天降り、その地に住んだ。しかし、その地が気に入らず船に乗って出雲国に渡り、そこで大蛇を退治して草薙の剣を手にする。五十猛命が天降った時樹木の種を持っていたが、韓地には植えず日本に持ち帰り、筑紫国からはじめて大八洲国を青山にした。そして、五十猛命はその後木の国(紀伊国)、伊太祁曾神社に祀られるのである。この神社には、五十猛命の妹神の大屋津姫命、都麻津姫命も祀られており、これらのことは出雲族が紀伊国に移住して大いに勢力を築いたことを示していると言われているのである。

では、五十猛命の末裔が南関東に移住して五十猛命を祀って多くの杉山神社を鎮座させたのは何故だったのであろうか。考えられるのは大きな政変に伴って新政権に追われたか、新政権の戦略によるものかということであろう。五十猛命の末裔の時代の大きな政変といえば、崇神朝の成立が考えられる。崇神朝といえば、四道將軍の派遣が想起される。「日本書紀」によれば、伯父の大彦命を北陸道に、その子の武渟川別を東海道に、丹波主命を丹波国に、吉備津彦命を西道に將軍として派遣し、これら地域を平定したのであった。しかしながら、この頃は多くの地方が小国の林立状態であり、四道將軍が軍隊を率いて制覇していったようなことは成立し難く、主だった国への国造派遣が主であったことが推論されるのである。

南関東地区への進出もそのようなものだったのでないだろうか。木の国の豪族に中央から南関東地区への進出の命が下された。それは、杉などの木材の開拓を目的とするものではなかったか。だから、樹木の神の末裔に命が下されたのであろう。移住した人々が祀ったのが杉山神社であることも、そのことを示唆しているものと考えられるのである。古来、杉材や楠材を浮宝(うきたから=船)の材料として珍重したのである。当時、覇権を主張するのに船は極めて重要であった。だからその材料の調達もまた然りであったのである。

さて、こうして鶴見川水系を中心に南関東に勢力を伸ばしていった杉山神社であり、江戸時代に編纂された「新編武蔵風土記」では72社の存在が確認されているほどである。しかしながら、多摩川の右岸には存在するが多摩川を越えた領域には存在が確認されないのである。このことは何を意味するのであろうか。

実は多摩川の左岸には多くの諏訪神社が鎮座しているのである。一見、多摩川を挟んで杉山神社と諏訪神社が対峙しているかの如くである。このことは何かの関係があるのだろうか。多摩川左岸に弥生時代後期のものとされる「久ヶ原遺跡」などが発掘されている。そして、それらから出土した土器は久ヶ原式と称されている。一方横浜市の港北地区遺跡から出土する土器はタイプが異なるとされている。そして、面白いことに各々は多摩川を越えないというのである。

専門家の分析によると、古代男女の仕事の分担があったとされる。男子の分担割合が高い仕事は、金属工芸・武器製作・狩猟・楽器製作・ボート製作・木材の加工などであった。女子

の分担割合が高い仕事は、穀物製粉・水運び・調理・野草などの採集・衣類製作・土器の製作などであった。注目されるのは土器の製作が女子の仕事であったことである。土器の製作方法は母親から娘に伝授される。娘は嫁いだ先で土器を製作する。とすれば、娘の製作する土器は製作方式の異なる場所に嫁いても、何らかの影響がでるのではないかということである。ということは、多摩川を挟んだ二つの地区は殆ど人的交流がなかったということになるのである。

多摩川流域歴史セミナーなるものが開催されている。この第一回は平成26年11月に行われ、考古学者・小田静夫氏が講演され、そのレジュメ「考古学的視点から見た多摩川の歴史」がNETに公開されている。その中で“多摩川流域への弥生文化の波及は、弥生中期(紀元前200年～紀元100年)に本格化した。その伝播は天竜川地域から中部高地を經由して山側から南下するコースと、太平洋沿岸部の海側地域を經由して東京湾を北上するコースが推定されている。そして、弥生時代後期(紀元200年～300年)には河口部に、大田区久ヶ原遺跡、世田谷区堂ヶ谷戸遺跡など環濠集落が形成された。内陸部の日野市、八王子市、青梅市周辺にも弥生後期の大規模集落遺跡が分布しており、八王子山王林、鞍骨山、神谷原遺跡が有名である。”など説明されている。

以上の内容は南関東地区への弥生文化の波及として主流をなす説である。しかしながら幾つかの疑問がある。一つは、弥生文化の伝播が天竜川地域から中部高地を經由して山側から南下したとする点である。山側から南下して内陸部の八王子周辺に弥生文化をもたらしたのは出雲系と考えられる。とすれば、天竜川を遡上してきた人々が誰かということが難しい問題となってきてしまうのである。それは、その頃出雲系の人々が断続的に天竜川を遡上したということが考えにくいからである。出雲系の人々は、建御名方神の平定後の諏訪から甲斐を經由して弥生文化を伝播させたものと解すれば平易に理解できるのである。又、出雲系の人々は越国經由で碓氷峠を越えて北関東にも進出していたのは既述のとおりである。

もう一つの疑問点は弥生文化の伝播が太平洋沿岸部を經由して東京湾を北上してきたとする点である。紀元前の東京湾沿岸には縄文人は北に移動して居住がなかったのではなかろうか。そのような所に弥生文化を帯同した人々が着地したとは考えられないのである。仮に若干の着地があったとしても、断続的な人々の移動がないと集落が形成されるような勢力にはならない。考えられるのは千葉県方面からの関東平野への断続的な移住ではなかろうか。そして、本書で既に度々既述しているように、そこに北関東に移住していたかつての縄文人が弥生文化を学んで元の地に戻ってきたのではないかと推論するのである。

東京都大田区大森に「諏訪神社」が鎮座する。祭神は建御名方神である。社格は旧村社であり小さな神社である。御由緒や創建年代は不詳とされており、実態は伝承などによる他ないのである。“その昔、大森海岸袖ヶ浦へ漂着した御神体を村民が尊崇し、祠を建立した。”と伝わる。その時期は江戸時代初期と言われているが、当地の古老の多くは鎌倉時代以前と

伝えているという。又、宮守の方の話として、“当社付近には長野県から移住した人々の末裔が多く、当社が祀られたのもその流れではないか。”、“大田区内には他にも数社諏訪神社が鎮座するが、当社から信仰が広まった可能性がある。”ということが紹介されている。

大田区内の他の諏訪神社とは、六郷諏訪神社(東京都大田区六郷)、馬込諏訪神社(東京都大田区馬込)、下丸子諏訪神社(東京都大田区下丸子)のことであろう。いずれも祭神は建御名方神である。そして、由緒や創建年代などは皆不詳である。いずれも小規模神社のためか、東京都神社庁に登録がない。又、江戸時代の「新編武蔵風土記」にも殆ど記載がないのである。

(多摩川)諏訪神社。東京都大田区多摩川二丁目に鎮座する。祭神は建御名方命と八坂刀売命の二柱である。旧原村(現多摩川二丁目界隈)の鎮守で、幕末まで隣接する東福寺が別当寺を務めていたという。村内には建御名方命を祀る上諏訪社と八坂刀売命を祀る下諏訪社の二社が鎮座していた。そして、明治13年(1880年)に上諏訪社に下諏訪社が合祀されたという。現社殿は平成14年(2002年)に造営されたものである。この(多摩川)諏訪神社、御由緒によると、創建は平安時代初期の承和年間(834年～848年)と伝えられ、信濃国・諏訪大社の御分霊を奉斎しているのだという。

上記の(多摩川)諏訪神社の創建が承和年間(834年～848年)という御由緒に注目してみたい。この頃の出来事といえば、坂上田村麻呂・征夷大將軍が蝦夷を平定した(802年)ことが想起される。既述のとおり、坂上田村麻呂は蝦夷平定に先立ち諏訪大明神に戦勝祈願しており、平定後は神恩に感謝して諏訪郡に多大な奉納がなされているのである。

又、桓武天皇が健甕(こんでい)の制を布いたのが延暦十一年(792年)のことだった。健甕の制では諸国の軍団・兵役を廃止した。その代わりに郡司の子弟や農民で武芸に秀でた者を国府の守備などに当たらせただけである。では、そのような状況下で坂上田村麻呂の蝦夷征討軍はどのように編成されたのであろうか。健甕の制は陸奥国と出羽国は除かれていたので、相当数現地で集められたことは想定されるが、そこまでの行軍も必要であったろう。そこで主力征討軍を編成すべく信濃国諏訪郡や武蔵国各郡などに指令が飛んだのではないだろうか。そのように考えることで、蝦夷平定後に諏訪郡に多大な神恩が奉納されたことの説明がつくのである。そして、貢献大であった武蔵国各郡には大いに諏訪大明神を勧請した。このことが、(多摩川)諏訪神社等々の創建の由来なのではないだろうか。

しかしながら、これだけでは(大森)諏訪神社の伝承には答えられない。伝承が伝えるのは、“その昔、大森海岸袖ヶ浦へ漂着した御神体を村民が尊崇し、祠を建立した。”ということだった。上記のとおり、(多摩川)諏訪神社の創建が承和年間であった。とすれば、同じく諏訪神社を名乗っている(大森)諏訪神社に御神体が流れついたのがそれより以降のはずがない。

本稿の第二章 諏訪大社の起源 で記述したように、諏訪大社は天武天皇の宗教改革によ

り、祭神として建御名方神と八坂刀売神を掲げることとなった。筆者の研究ではその時期は諏訪国が分国された頃(721年～731年)と捉えている。しかしながら、それ以前は出雲から進出してきた建御名方神たちが尊崇して祀っていたのはスサノオであり、狩猟系の諏訪衆はミシヤクジ神を掲げて祀っていたのだった。

このように推論を進めると、その昔大森海岸袖ヶ浦に漂着した御神体とはスサノオしか考えられないのである。その昔、弥生の海退によって北関東に移住を余儀なくされていた嘗ての南関東の縄文人が出雲系の文化と血を帯同して戻ってきたのである。荒川を下り、そして大森海岸にたどり着き、多摩川を遡上して行ったのではないだろうか。

東京都大田区に鎮座する多くの諏訪神社は、創建時期をはじめとして古い時期の殆どのが不詳である。それは多摩川の氾濫に原因があるだろう。往古より度重なる大水や氾濫により神社は幾度となく流失され、御神体や由緒書きなども一緒に流された。しかしながら、厚い信仰心が流失されることはなかった。出雲やスサノオが流されることはなかったのである。そして、各地域で勢力を築いた人々は坂上田村麻呂の蝦夷征討に参戦する。そして、迎えた承和年間(834年～848年)には、誉高き諏訪大明神を勧請することとなるのである。

最後に、多摩川を挟んで杉山神社と諏訪神社が融合しなかった理由について検討しなくてはならない。杉山神社は既述のとおり、五十猛命を祭神として祀るその末裔の人々の集団と考えられる。そして、五十猛命はスサノオを父とする生粋の出雲系である。その人々が崇神朝の命により国造として船材を求めて南関東に進出してきた。そして、多摩川右岸一帯の丘陵地に勢力を広げたのであった。それは、紀元3世紀～4世紀頃のことと思われる。

一方、同じ頃多摩川左岸一帯に勢力を築いた集団がいた。彼らは北関東で出雲系の文化を学んで祖先の地に戻ってきた人々であった。そして、彼らも又同じようにスサノオを崇敬していたものと考えられる。

では、同じようにスサノオを崇敬する人々同志が、何故融合することがなかったのであろうか。それはひとえに杉山神社系が国造をいただいた、言わば中央(崇神朝)の意向を背負った進出者であり、片や諏訪神社系は言わば地場の人々であり祖先から受け継いだ地を守るという立場になっており、もはや同系とはいえなくなっていたのではないかと推論するものである。

了

<君の名は>

平成28年(2016年)に、「君の名は。」というアニメ映画が大ヒットした。「君の名は」というと1952年にラジオドラマで人気を博し、その後映画化されたりした往年のヒット作を思い浮かべる人がいるかもしれないが、それではないのである。こちらの「君の名は。」は、新海誠監督

の長編アニメ映画で、2016年8月26日に公開された。新海作品としては前作が全国 23 館の公開だったのに比べ、本作は東宝系全国300館という大規模な興業となった。そして、興業収入においても宮崎駿監督の「もののけ姫」などを超える大ヒットとなったのである。

“東京で暮らす少年・立花瀧(たき)と飛驒の山奥で暮らす少女・宮水三葉(みつは)の身に起きた「入れ替わり」という謎の現象と、1200年ぶりに地球に接近する架空の彗星「ディアマト彗星」を巡る出来事を描く。その出来事とは…” “宮水三葉は岐阜県飛驒地方の山奥にある糸守町に住む女子高生である。町の中心に小さな湖(糸守湖)があり、町は湖を囲むように家々が点在する。町から山に向かって階段があり、それは宮水神社の参道であった。そして、実は三葉の家は宮水神社の宮司の家であったのである。”

このアニメ映画の舞台となっている、岐阜県飛驒地方の山奥にある糸守町は架空の町であるが、糸守湖はそのモデルになった湖が既に明らかにされている。それは、新海誠監督の出身地である長野県小海町の松原湖であることをご本人がツイッターで述べられている。

小海町は八ヶ岳東麓にある。JR東日本の小海線が通る。小海線は山梨県北杜市の小淵沢駅から長野県小諸市の小諸駅までを結ぶ高原鉄道である。途中標高1375mのJR鉄道最高地点を通過する。沿線にはリゾート地として名高い清里がある。又、レジャーや牧場などで人気の野辺山高原のある野辺山駅はJRの駅で最も高いところ(1345m)にある。

小海町には「松原諏方神社(まつばらすわじんじゃ)」が鎮座する。松原湖は猪名湖(いなこ)、長湖(ちょうこ)、大月湖(おおつきこ)の三湖を総称して呼ぶ名称で、諏方神社は猪名湖の湖畔に位置する。湖の南側の小高い丘の上に鎮座するのが上社、反対側の低い位置に鎮座するのが下社である。祭神は建御名方命、事代主命、下照昆売命とされている。

この「松原諏方神社」、湖を挟んで上社と下社が鎮座する位置関係は諏訪大社と良く似ている。諏訪大社が諏訪湖を挟んで諏訪大社上社(本宮)と下社(秋宮)と向かい合っている位置関係は真に瓜二つである。又、松原湖から少し入った御射山原という所がある。そこでは今でも毎年8月に仮宮を造り御射山祭が行われているという。この御射山祭については、諏訪大社には奥社・御射山社があり、御射山祭が行われているのである。更には、この神社では御柱祭も催行されている。諏訪大社と同様、六年に一度申年と寅年に行われる。宝暦二年(1752年)の「松原諏方神社上下社境内図」には御柱が一本ずつ描かれているという。この上下社一本の御柱を建立する風習は継続され今日にいたっている。

松原諏方神社の創建時期は明確ではない。しかしながら、往古から自然信仰があったのではないかと思われる。その名残が御射山原の御射山祭であろう。昔の人は狩の成功や戦勝を祈願したのではないだろうか。そして、伝承などから平安時代から鎌倉時代のどこかで諏訪大社から諏訪大名神が勧請されたものと考えられる。

八ヶ岳は長野県の諏訪地域と佐久地域及び山梨県の境にある。四季を通じて色々な姿を

見せたいへん美しい連峰である。南北30Kmに及ぶ長さで連なる。又、広大な裾野を誇り、東側には清里高原・野辺山高原、西側には富士見高原・蓼科高原と著名な別荘地やリゾート地が広がる。

八ヶ岳一帯は火山帯でもある。確実な噴火記録は残っていないが、888年に北八ヶ岳の天狗岳が崩壊しその結果、丘陵地の窪地を流れる大月川が泥流により堰きとめられ松原湖が誕生したと考えられている。しかしながら、その天狗岳崩壊の理由が地震なのか噴火なのか現在でも証拠が見つからず、大きな謎となっている。若しかして…。若しかして彗星の激突であったのであろうか。

<参考文献>

- | | | |
|---------------------------------------|----------------|------------------|
| ・ オールカラーで分かりやすい
古事記・日本書紀 | 多田 元監修 | 西東社 |
| ・ 眠れないほど面白い「古事記」 | 由良弥生著 | 三笠書房 |
| ・ 信濃が語る古代氏族と天皇 | 関 裕二著 | 祥伝社新書 |
| ・ 「善光寺道名所図会」を歩く | 善光寺街道協議会・編 | |
| ・ 出雲弥生の森博物館 展示ガイド | 出雲弥生の森博物館編集・発行 | |
| ・ 甦る高原の縄文王国 | 井戸尻考古館・編 | 言叢社 |
| ・ アニメ映画「君の名は。」 | 新海誠監督 | 「君の名は。」
製作委員会 |
| ・ 武蔵野台地における弥生時代の
地域的様相 | 小出輝雄著 | WEBサイト |
| ・ 日本人の先祖と建国黎明期に
活躍した人々 | 山下重良著 | WEBサイト |
| ・ 東京都の神社 | 猫のあしあと | WEBサイト |
| ・ 翡翠・黒曜石・諏訪大社・御柱祭
オオヤマツミ・杉山神社・八ヶ岳他 | ウィキペディア | WEBサイト |